

フランクフルト森の幼稚園での子どもの育ちについて

—領域「環境」の視点から—

横井 一之・堀 建治

On the Educational Meanings of Woods' Kindergartens in Frankfurt, Germany from the Viewpoint of an Educational Field: Environment

Kazuyuki YOKOI and Kenji HORI

要旨

森の幼稚園のことがテレビで紹介されたり、ヨーロッパで実際に見学してきたという話をよく聞くようになった。本邦でも森の幼稚園を実施しているところがあると耳にした。

この度、ドイツの森の幼稚園を見学する機会を得た。本稿では森の幼稚園の教育的意義を領域「環境」の視点から論じたい。

なお、森の幼稚園の起源についてドイツ、デンマーク、スウェーデンの様子について整理したい。

Summary

Nowadays we often hear that Woods' Kindergartens are introduced on TV and these in Europe are visited. I also hear that some kindergartens are run in Japan. We recently visited such kindergartens in Germany.

Therefore, we discuss the educational meanings of such kindergartens from the viewpoint of the field "environment" in this paper. In addition, we argue the origin of such kindergartens by investigating those of Germany, Denmark and Sweden individually.

表1 森の幼稚園の日課表（2012.3.6.）

時	分	活動(Aグループ:9名)	活動(Bグループ:8名)
8	10	登園	
8	30	朝の会	
8	50	移動のための身支度	
8	50	活動場所への移動	
9	09	活動場所(森の広場)到着	
9	10	森の集会(活動の伝達:森の集会所)	
9	14	グループ活動導入	森の中での自由遊び
9	35	音楽表現活動	
9	40	枝を集めてお話	
9	50	妖精さんこんにちは	
9	55	片付け・スナックタイム準備	
10	00	スナックタイム(おやつ)	
10	30	森の中での自由遊び	グループ活動導入
10	40		音楽表現活動
11	00	工作あそび1	枝を集めてお話
11	02	工作あそび2	妖精さんこんにちは
11	15	工作(枝を揃える)	
11	32	応急手当	
12	21	絵本の読み聞かせを聞く	
12	43	朝の集合場所へ戻る準備	
12	45	移動開始	
12	55	保護者の待つ場所へ到着	

1. ドイツ・フランクフルト市郊外の森の幼稚園を訪問して

筆者兩名は、ドイツ連邦共和国フランクフルト市郊外にある森の幼稚園を訪問して、その保育を見学した。表1は森の幼稚園の日課表である。以下、時系列に従って説明を加える。

1・1. 森の幼稚園へ

森の幼稚園は、フランクフルト市の郊外、パート・ホンブルクの森にある。筆者等は朝6時に宿舎を出発し、SバーンのS5線でSeubergに向かった。1つ手前にBad Homburg 駅があるが、復路は幼稚園付近からバスに乗り、この駅を経由してフランクフルト中央駅に戻った。

エバ先生と8時に図1の①、ここは住宅街と森林地区を区切る2つの通りの交差点であるが、この①で待ち合わせる約束であった。最初に①にやってきたのは4歳女児母子であった。先生と間違えてそのお母さんに英語で話しかけると、「まもなく、先生がいらっしゃる」と答えた。

8時20分ごろエバ先生がいらっしゃったころには続々と子どもと親御さんが登場なさった。図1の②が集合場所で、森林地区“Bad Homburg Wald”の公園になっており、リスの立体看板、ブランコ、野ざらしの6畳ほどの小屋、砂場、回転遊具、滑り台などが設置されており、子ども達は登園すると、寸暇を惜しんで遊具で遊んでいた。

1・2. 朝の会

②の公園の空き地で、17人の子ども、2人の先生、1名の音楽教師、我々見学者2名が1重円を作り、朝の会が始まった。集会が始まる前というより、公園にやってきて、回転遊具などを利用する前にナップを下ろしている。これは日本の幼児施設でも、バッグ等が遊具にひっかかり、死亡事故に陥る恐れがあるので徹底して指導しているとのことである。そして、手袋を取り外し集会にのぞんだ。日頃からそのように指導を受けているようだ。

まず、全員の子どもの先生を手本として手を動かしながらリズムを取りながら歌をうたった。その後、当番の子どもの一人ひとり数えて出席者を確認した。

次は、歌に合わせて個々の子どもが周りの子どもに「元気な子はだあれ」「エバちゃんです」というように順番に一回り回転しながら挨拶した。朝の会は20分ほどで終了した。子どもを送ってきた親御さん等は、この朝の会の途中で徐々に帰宅して姿が見えなくなっていた。登園したときは泣いていた子どもも、といってもこのときは昨日入園した3歳女児だけだったが、その子どももブラクス先生が母親から登園時受け入れた時は泣いていたが、朝の会が終わるころには母親のことも忘れ、活動に集中していた。朝の会が終わると、子ども達はナップを背負い、手袋をはめて再集合した。顔の分かった17名なので特に1列に並ぶという、並び方ではない。

1・3. 活動場所への移動

この日の活動場所へは、②よりレッシング通りを横切り北東へ林道に入って行く。そして、

次の林道へたどり着く前に南に森林の中に 300m×300m ぐらいの広場(図 2)がある。この広場がこの日の活動場所である。園舎はない。後にエバ先生に何うと「少々の雨なら、森の中で活動します。嵐や雷雨のときは、近くの教会を使わせていただくようになっています」という話だった。

子どもは全員で 17 名で、3 歳～5 歳のものがある。特に確認しなかったが、4、5 歳児が各 7 名、3 歳児が 4、5 名だった。集団はクラスというより、やや多めの家族という感じだった。移動の方法も、エバ先生が移動しやすい 4、5 歳児と一緒に先頭を歩き誘導して、それにしたがって、3 歳児を中心とする歩くのが遅いグループが付いていくという感じであった。小さい子どもの担当はブラクンス先生で、昨日入園した 3 歳女児はしっかりと先生と手をつないで歩いていた。途中、2 つのグループの距離が空きすぎると先のグループが立ち止まって、後のグループが追い付くのを待っていてくれる。もちろん、待っている間も小枝を拾ったり、葉っぱを拾ったりしている子どもがいる。

後のグループが追い付くと、先のグループが再び活動場所を目指して出発である。きっと、上からこの集団を見ると、青虫が体を波打ち移動しているようだったと思う。2 度ほど大きな休憩を取り活動場所に到着した。



図 1 森の幼稚園の位置



図 2 森の広場に到着して



図 3 樹木の遊具で遊ぶ



図 4 枝をやすりで刻む

結局、何うことができなかつたが、この森は4～50haほどあるようである。ただし、森といつても日本のように、切り立った谷がある訳でなく、平坦な大地に4～50mある大木がずっとそびえ立っている。広くて深い森である。

1・4. 森の集会

森の広場の真ん中には、ちょっと太めの枝で19名全員が座れるような椅子が整えられている。ここでちょっとした疑問が浮かんだ。たまたまこの広場にやってきたところ、別の子ども集団がすでにいたとするとどうなるか。これは日本の都会の疑問に過ぎないと一蹴された。

エバ先生によると「このバート・ホンブルグの森には私たちの幼稚園だけがあり、この森の中に45箇所の活動ポイントをもっている。それらを活動に合わせて移動して保育を実践している」ということだ。活動の途中で気づいたが、100m離れた林道をときどき散歩する人々がいる。大通りからは500mは離れていない。緊急の場合は救急車等が広場に駆けつけることは十分可能である。住宅地が大きな樹木の森と極近の距離にあるのである。そして、その森は広大である。その森の中に活動ポイントを設定して森の幼稚園は展開されている。

さて、森の広場に到着すると、この日がさほど寒い日ではなかつたので、いわゆる小春日和だったが、全員手袋をはずして一か所の切り株の上に山積み状に置いた。これから、みんながらんぼるぞという意思の表現にも見えた。それから、車座になり枝の椅子に座り、それぞれの子どもが自分の背中後ろにナップを置いた。これで、椅子の位置の指定もできたようだった。その指定席に座り、2人の先生から森の幼稚園での約束、本日の活動について話を聞いた。残念ながら、森の幼稚園の約束については、ドイツ語だったので理解することはできなかつた。

1・5. グループ活動・音楽表現・ドラマ

この日は音楽の特別教師としてナディ先生がいらっしゃった。森の集会が終わると、Aグループ(仮称)9名の子どもがナディ先生と一緒に他の空間に車座になっていた。森の中は一面、枝や葉っぱの絨毯になっているので、直に座ってもさほど汚れない。もちろん、先生、子ども達の服装は雪山の中でも寒くないような防水のオーバーズボンに長靴を身に付けている。少々の風雨、降雪にも何の問題もない。

初めにナディ先生は、子ども達に森の音をよく聴くようにと話をなされた。大木を通り抜ける風の音、枝をすり抜ける風の音、小枝が揺れるときの葉っぱの音、いろいろな音が聞こえる。大きな木に付いている緑色の苔は模様を作る。そらそこに妖精が隠れていても不思議でない。次に、先生は歌を歌われた。さほど大きな声ではないが、森の中に来て研ぎ澄まされた子どもの耳には、いや我々見学者にもとてもはっきりと聞こえる素敵なお声だった。シラーがいう「神が与えたもっとも素晴らしい楽器は人間の声である」が素直に理解できる。「あそこに、なにかいるよ」というナディ先生の言葉がけに子ども達が、そっと近づいて確かめる。何もいない。「今度はあっちよ」という先生の声に、子ども達はそちらにそっと近づく。音を頼りに探して

いるので、誰も大きな足音はたてない。

ナディ先生はバッグの中に、シンバルとばち、タンバリン、マラカス、ウッドブロック、トライアングル、カスタネットを用意なさっていた。「さあ、次はシンバルを叩いたら妖精を探しに出かけてね」とおっしゃり、子ども達は先生のシンバルの合図とともに大きな木の後ろを覗き込んで妖精を見つけようとした。次は一人の女兒を指名して「シンバルの音をヒントに見つけてね」とおっしゃった。その女兒は先生の少し長い話を聞いてから、音をよく聴いて妖精を探した。

大木の根っこには新しい枝が芽を出して、4,50の枝が群れを成している。後に写真で見ると背丈は2mぐらいあり、大人には見通しも効き何てことはないが、子ども達はすっぽりと入ってしまい、枝の群に入ると森に入り込んだように見える。ナディ先生は、子ども達をその枝の森に誘った。そして、森の中に入る前に「妖精に会ったらあいさつできるかな」子ども達の興味を高めた。子ども達は先生のシンバルの音を頼りに森の中に入った。もちろん、子どもにとっても枝の群の森だから安心して活動できる。

枝の群からでると、次は森を大きく使う鬼ごっこ様の運動遊びをした。見通しが効く50m先の大木をポイントとして、シンバルの音がするとそのポイントへ逃げ隠れる、そしてウッドブロックの音がすると先生のところに戻るといった遊びをした。シンバルの音がしている間は木の後ろに身を隠していなければならない。いつウッドブロックの音に替わるかわからないので、楽器の音に耳を立てていなければならないし、先生がどの楽器をもっているかも目で確認しなければならない。ハラハラドキドキ興奮する活動である。

楽器を用いた活動の後は、みんなで集まって枝や葉っぱをあつめ、その周りに座り、ナディ先生は子ども達に森の話をした。先生が一人の男児を指名して、50cmぐらいの棒をもって少し離れたところの切り株へ向かわせた。妖精がいるのだろうか、それとも何か怖い動物がいるのだろうか。他の子どもはその男児の後に付いていく。「ああ、ここじゃない。あっちの切り株だ」その男児といっしょに、一同が追いかける。何も見つけることができずに残念ではあったが、その後、先ほどの枝の群の森の近くに車座となり、簡単な振り返りをしてグループ活動が終了した。

1・6．森の中での自由遊び

Aグループがグループ活動している間、Bグループ(仮称)8名はエバ先生、ブラクンス先生の指導の下、以下のような自由遊びを行った。

1・6・1．木のジャングルジム

以前倒壊した大木の大きな枝や幹のみが残り、ちょうど木登りに適したように横たわっている。大きな幹をまたぐとちょうどジャングルジムのてっぺんぐらいの高さである(図3)。子どもが上っている樹木をよく見ると、大きな根っこがむき出しになっており、それが子どもの背丈よりおおきい。それは岩のようでもあるが、その岩登りを失敗すればドスンとかなり痛い。

この付近は、太い枝、細い枝が地面いっぱい落ちており、平坦なところはない。足の状態を調整しないと、ただ立っていることもできない。

1・6・2. 根っこ掘り

大きな枝、小さな枝を用いて大木の根元を掘る。枝葉を取り除き、朽ちた葉、枝の柔らかい腐葉土をどけ、土を枝で搔いて掘る。深く掘ると湿り気が多い重い土となる。

友と一緒に2人で根っこの下を掘るが、根っこは大きく簡単には空間が下でつながってトンネルとはなってくれない。友と一緒に「どうしたら、つながるかな？」と考える。根っこの下のトンネルがつながると、砂山のトンネルとはまた違った喜びである。

1・6・3. 腰掛探し

森の中では、どこへ移動しても最初にするのが座るもの、腰掛となる切り株や大きな枝を探すのが最初の遊びである。

1・6・4. シーソー

5mほどの枝を見つけ登る。そこへ友が来て枝の離れた部分に登る。枝の地面に接している部分を支点として、それぞれの子どもが上下に揺れる。片方が力を入れるとそちらが下がり、他方が上がる。後は、2人で心地よい揺れを楽しむ。

1・7. スナックタイム（おやつ、朝食と昼食をあわせたようなもの）

子どものおやつは栄養の補給、水分の補給のために欠かすことができないものである。Aグループの活動の終了時刻に合わせるように、子どもが全員（4）森の集会を行った最初の椅子に車座に座った。その様子は、大きな円形の森のソファーに座って集会をしているようだった。森のソファーに座り、子ども達は朝お母さんが用意してくれたお茶とスナック菓子でスナックタイムを楽しんだ。しかし、このソファーだけでは季節がらお尻が冷たいため、各自がナップの中に折り畳み式の樹脂の座布団を持参しており、それを利用していった。ブラクンス先生はこの活動場所への移動のとき、ナップに鍋蓋大の少し厚めの茶色いゴム様のものをぶら下げた。「あれは何だろう？」という謎がこの時解決した。ブラクンス先生の森の座布団だったのである。

森のソファーに一重円となって座ると、気持ちを切り替える意味で全員が手を握り挨拶を交わし、先生の話が終わると手を離す。そして、各自がタッパーウェアの中に用意した濡れタオルで手をふく。そして、お茶を飲んだり、スナックを食べたりする。スナックだが、黒い色のライ麦パンにハム、レタスなどを簡単にはさんだサンドイッチを持参した子どもがほとんどで、一緒に話をしながら楽しそうに食べている。

スナックタイムはおよそ30分で終了し、その後、AグループとBグループが交代してグループ活動、自由遊びを45分行った。

1・8. 工作遊び

Bグループが音楽表現活動をしている間、Aグループは自由遊びをしていたが、エバ先生が工作道具を取り出して活動に変化が表れた。Bグループの子どもは、森の広場にやってきて2時間たったので、興味関心を少し変えようとなさったと思われる。

工作道具はノコギリ、細い棒状ヤスリ、平ヤスリ、糸ノコなどである。それまでは、森の大木を身体全体で移動させたり、乗ったり、また幹や枝を集めて山を作ったりしていた。いわば大きな運動の遊びをしていた。ところが、工作道具の登場で、遊びが芸術遊び、創造遊びへと変容した。ある4歳女児は細い棒状ヤスリで枝を等間隔に削り、その縞状の模様を楽しんでいる。別の3歳女児は糸ノコで小枝を小刻みに切り落としていた(図4)。道具の登場にもかかわらず、土で粘土遊びを続ける4歳男児もいる。

道具の登場に付き物はけがである。ある4歳女児が細い棒状ヤスリで自分の指まで削ってしまった。すぐに、その事態をエバ先生に伝える。エバ先生は、薬品袋からバンドエイド(簡易絆創膏)を取り出して処置した。子どもはしばらくけがをしたところを気にしていたが、作業を続けた。

Bグループの音楽表現活動が終了すると、ナディ先生は2人の先生と私たち見学者にも挨拶して帰宅なさった。その後、Bグループの子ども達は工作遊びに合流した。

1・9. 読み聞かせ

切り株の椅子の上においてある絵本に子ども達は気付いており、3,4名の子どもが集まって絵本をのぞき込んでいた。そのタイトルは「火の起源」だった。日本の保育様に表記すると「ひとはなんでしょう」とか「ひのはじまり」だろうか。

ブラクンス先生の前に子どもが放射状にあつまり、葉っぱの絨毯の上にズボンのまま座り読み聞かせが始まった。初春であるので、さきほどスナックタイムにはまだお尻が冷たいという感じだったが、このときは温かくなってきている。子ども達は集中して先生の話聞いた。先生が読んでいるときには、子ども同士は話をしない。先生は、やや小さい絵なので、絵を見せながら子ども達の間を巡回する。それを子ども達の目が一斉に追う。

最後に子どもの2,3の質問に先生が答えた。

1・10. 移動の準備・移動・降園

絵本を聞き終わると子ども達は移動の準備を始めた。服装を整え、ナップを背負い、手袋をはめる。手袋置き場の切り株の上から手袋が無くなると移動準備完了である。

エバ先生が「さあ行きましょう」と優しく声をかけ、移動を開始した。年長の速く歩くことができる子どもがエバ先生に続く。安全に走ることができる場所が理解できているようで、エバ先生の後ろでかけっこをしている。エバ先生も、先生を追い越して先に行き過ぎない限り、ニコニコ笑顔で見守るだけで何の注意もしない。教師との信頼感の中で、子どもには自信が育

っているように感じた。そして、曲がり角や大きな切り株があるターニングポイントで、年長の子どもは遅れてやってくる年少の子どもを見守っている。ブラクンス先生と3歳女兒が到着すると、次のポイントに向かい一行は再出発する。これを3度ほど繰り返して、保護者の待つポイント、そこは朝我々が先生や子どもを待った地点だが、そこへ到着した。エバ先生が保護者の位置から10mぐらいのところで子ども達を横一列に整列するように声をかけると、子ども達は静止した。そして、エバ先生の合図で保護者と抱き合ったり、「おかえりなさい。よくがんばったね」と再開の喜びの声を掛け合っている。

1・11. まとめ

まずもって、半日森の幼稚園の様子を観察させていただいたエバ先生、ブラクンス先生そして17名の子ども達、音楽教師のナディ先生に心からお礼を述べたい。発見はできなかったが、森に妖精がいたような気がした。

幸いにして好天に恵まれ、朝の会は快調に行われた。おそらく、言葉の問題があるからだろうが、子ども達に我々見学者があいさつするという事はなかった。そういう点では、通訳を同行するか、ある程度のドイツ語を話すのが礼儀だと反省している。

バート・ホンブルクの森は、平坦な台地にある広大な森で、30mを越える大木が5~10m毎に連なっている。日本では、狭い面積に大きな樹木が生えているところは見たことがあるが、これほど高木が連なっているところは見たことがない。日本では、これだけの広い森だと、必ず土地の高低が生じ、形状が山状となる。実際、これしか方法がないので諸用を足すために森の広場から南へほんの50mぐらい離れたのだが、樹木の重なりのお蔭で子どもの歓声は聞こえるのだが姿はまったく見えなくなった。

朝の会も含めて、どの子どもも教師からの大きな声の指示を受けることなく、自分のすべきことを理解して行動していた。もちろん、広い森で大声を出しても有効には伝わらないが、子どもも教師も、もちろん同行の見学者もお互いの位置を絶えず意識していることが森の幼稚園での第1の掟である。現代社会では、特に都会での生活では情報過多となることが多く、集中力を欠くことが多い。そういう点で、子どもの森での生活は集中力を高める。

家族的集団が、人への思いやりを育てる効果があることはしばしば論じられるところである。この、森の幼稚園家族でも、広場への移動等で年長児が年少児の足に合わせるなど、極自然に弱者への思いやりが育っている。そして、このことを成し遂げるために、子どもは他の子どもを一人ひとりよく観察している。

グループ活動はナディ先生が音楽活動を中心に展開された。前述したように、リズム楽器のみで音階楽器は使用していない。指導は音が中心ではあるが想像性を書きたてるドラマや、もちろんこれは言葉の指導も含まれるし、登場する妖精は子どもの表現能力を高める。健康面を含め、日本の幼稚園教育要領に照らし合わせても、すべての領域の内容を満たした素晴らしい総合的活動だと言える。

この日はグループ活動の後に読み聞かせが行われたが、その内容は火の起源で、日本では林間学習と言えばキャンプファイヤーで、森の生活にふさわしい内容であると感じた。しかし、これは確認をしなかったが、森の幼稚園というかこの森の中では火気厳禁であろう。もちろん、たき火等の跡は一度も目にしなかった。

子どもの行動に余裕を感じたのは、集合場所へ戻るときに、年少児を待つ年長児のかけっこにおいてである。何度も通る林道なので、危険な個所と比較的安全な個所を理解しており、よいと判断したら「いくよ」という友達同士の阿吽の呼吸でかけっこが始まる。エバ先生も、それを優しく見守る。本当に子どもらしい姿で、先生の姿も親子のようだと微笑ましく見せていただいた。

エバ先生とブラクンス先生だが、お二人とも10年位一般幼稚園での教師経験があるとおっしゃった。「どちらがリーダーか？」と尋ねると「決まっていない」という答だった。観察していると、エバ先生が全体に指示を出し、ブラクンス先生がフォローをなさっていたので、意外な答だった。さらに「もし、どちらかの先生が欠席のときはどうするか」と尋ねたところ、「保護者をお願いしている」ということだった。

2. いろいろな森の幼稚園

2・1 ドイツ・フライブルク市にある森の幼稚園について

今泉・アンネッテ¹⁾は、3歳半男児フェリックスを主人公にシュテルンバルト(星の森)幼稚園を著している。今泉はあとがき(にかえて)に「この本は、わたしが住むドイツ、フライブルクや近郊の町にある森の幼稚園でじっさいに見られたことや、森の幼稚園について書かれたさまざまな本に紹介されている事例をもとにして書きました。」と述べている。その内容を示すと、表2、表3、表4のとおりである。

表2 星の森幼稚園第1部

①おかしな幼稚園
②朝のあいさつ
③たのしい川あそび
④丸太の汽車
⑤森の住人たち
⑥きゆうな坂をのぼる
⑦森のソファ
⑧おもちゃはいらない
⑨フェリックスのお願いごと
⑩森の約束
⑪ゴミの実験
⑫アリのお城

表3 第2部目次

①おち葉のパレット	②森の木の実
③大雨の森で	④リンゴの実験
⑤森の小人	⑥雪についた足あと
⑦もうすぐクリスマス	

表4 第3部目次

①栄養いっぱいのお土
②カエルの卵
③においあてあそび
④マルハナバチをなでる
⑤フェリックスが見つけたもの
⑥夏がきた
⑦またあう日まで

表5 星の森幼稚園概要

子ども	: 10名 (3～5歳) フェリックス(3歳)♂、パブロ(4歳)♂、ベス(4歳)♀、エリカ♀、ハンス♂ (年齢が分かる子どもは記入した。他の子どもは誰か不明)
保育士	: 2名(アンドレア先生、マリア先生)
服装	: ジャケット、防水のオーバーズボン、長靴

2・2. ペーター・ヘフナー²⁾による森の幼稚園の分析

ペーター・ヘフナー(以下ペーターと表す)によると「(ドイツの)森の幼稚園は、就学前教育における新たな代替物であり将来展望である。」「ドイツではこういう施設は、1990年代初めに降存在する。」「現在ドイツにはおよそ350の森の幼稚園があり、さらに増える傾向にある。」ということだ。

ペーターは森の幼稚園を表6のように4種類に分類している。また、森の危険として表7のように示している。

ペーターは、2001～2002年に小学校1年生である森の幼稚園出身者230名、正規の幼稚園出身者114名について、小学校1年生の担任に42項目について1～6点(1点:該当するから6点:該当しない)で回答してもらい、それらのデータを分析した。まず、表8のような6因子を抽出し、各出身者の平均点を比較した。そして、森の幼稚園修了者の方がよい結果だったと結論づけている。

表6 森の幼稚園の分類

- | | | |
|---------------------|------------|------------|
| ①「純粹の」森の幼稚園 | ②融合的な森の幼稚園 | ③固定的な森のクラス |
| ④流動的な森のクラスもしくは巡回クラス | | |

表7 森の危険

- | | | | |
|-----------|-------|----------|---------|
| ①悪天候と風害 | ②虫さされ | ③毒草と有毒果実 | ④狂犬病の危険 |
| ⑤極小狐サナダムシ | | | |
| ⑥ダニによる病気 | | | |

表8 6つの因子と平均値の比較

因子名	正規の幼稚園修了者	森の幼稚園修了者
因子1: 動機付け・忍耐・集中	平均点 2.28	2.09
因子2: 社会的行動	2.21	2.01
因子3: 授業中の協働	2.51	2.16
因子4: 美の領域	2.39	2.26
因子5: 認識の領域	2.00	1.95
因子6: 身体的領域	1.94	1.92

2・3. デンマークにある森の幼稚園について

石亀³⁾は写真集の巻頭の解説で、グラドサクサ市にある森の幼稚園の目的を次のように書いている。

- ①子どもに自然を体験させる。
- ②森の動物や植物を尊重しつつ自然と交わらせる。
- ③四季を学ばせる。
- ④子どもの運動力、感覚、言葉、想像力、自立性、協調性を育てる。
- ⑤これからの発達の可能性は、それぞれの子どものテンポを基にする。

(デンマークの幼稚園では、子どもの個性をのばすことに重きをおいている。学習の場ではないので、読み書きや数を教えたり、団体で行動させることはない。教えるのは、森の木や生きものたちを大切にすることや、みんなが仲よくすること)

また、澤渡⁴⁾はその著書の中で森の保育園について、「私がこの森の保育園を新聞記事で知ったのは今から二五年も前のことで、すでに保育園はスタートしてから20年が経過していました。(中略)そもそもは、1970年初頭に、『子どもたちを自然の中で育てたい』と願うグラッドサクセ市の保護者数名が集まり、数人ずつ交代で子どもたちを近郊の森『ハースコウ』に連れていったのが始まりでした。」と述べている。

前述のペーター²⁾によると「最初の森の幼稚園は1954年にデンマークでエラ・フラタウ(Ella Flatau)夫人によって創られた。」ということだ。

2・4. スウェーデンにある森のムッレ教室(幼稚園)について

高見幸子⁵⁾によると、森のムッレ教室(幼稚園)は1957年に生まれた。その母体はスウェーデンで伝統的に活動してきた市民団体の中から組織化されてきた「スキー推進協会」後の野外生活推進協会である。現在では、日本野外生活推進協会(森のムッレ協会)が兵庫県丹波市に設置されており、日本各地で活動をなさっている。

そのスウェーデンで環境教育の教科書として使われているのが「視点をかえてー自然・人間・全体」⁶⁾で、生物圏(万物のつながり、四大要素、太陽、空気、水、土、流れ、循環、生命とは何か、生態系)、私たちが利用しうる資源(情報、天然資源、廃棄物、エネルギー、人間社会とエネルギー)、社会について述べられている。東日本大震災以後話題になっている原子力発電についても、廃棄物のところで「有害な核廃棄物については、その責任者たちは、いずれかの方法によって適当な時期に、どこかに片づけようと考えてきた。しかし、……(以下略)」と取り上げられている。

3. 考察

1. で紹介したバート・ホンブルクの森の幼稚園には園舎はない。よって先行投資が必要ないので、有能な教師と信頼、良好な森があれば明日からでも保育が開始できると思った。もち

ろん、2. 表7で示したように、森には数々の危険が潜在するのも確かで、救急搬送等消防署や病院との連絡も配慮しなければいけない。一方、2. 1. のドイツ・フライブルクのシュテルンバルト(星の森)幼稚園では、荷物をしまったり雨宿りの為の簡単なコンテナ車があった。また、2. 2. のデンマークの森の幼稚園は園舎がある。この点はペーターの表6「森の幼稚園の分類表」が有効である。

表8のように、森の幼稚園の効果についてはペーターにより既に分析されているし、本稿でも1. 11. にも観察した結果をまとめさせていただいた。ここでは、領域「環境」の視点から、その教育効果を表9のようにまとめた。

ドイツにはキリスト教系のカリタス福祉会が多く経営する KITA (Kindertagesstätte) という保育所と学童保育を合体させたような認定こども園がある。この KITA に通園する子どもも多くいる。ドイツは州の自治が強く、国内で統一はされていないが、小学校も含め午後1時ごろには幼稚園が終了する。午後は社会体育等に利用されていることが多い。この点は、森の幼稚園の保育時間は一般幼稚園と同等である。ドイツの幼児施設関係の分析を行うときは、幼稚園

表9 幼稚園教育要領領域「環境」の視点からまとめた森の幼稚園の教育効果
(番号は、幼稚園教育要領領域「環境」の項目番号)

番号	かかわりある活動
(1)	森で暮らして、自然の大きさ、美しさ、不思議さを感じて活動している。
(2)	シーソー遊びで、その仕組みについて学んでいる。曲がった樹木の幹のシーソーは、その動きが複雑である。
(3)	針葉樹の葉は落ちていなかったが、すでに昨秋の落ち葉が朽ちかけていた。
(4)	グループ活動では、新しく生えた芽から伸びた枝の群を妖精に見立てて鬼ごっこを展開した。
(5)	根っこの周りの土を掘り起こすと湿っているし、さらに細かい根が張っている。生きている樹木を体全体で感じている。
(6)	楽器や木工道具を大切に扱っている。大事だから、使ったら先生にきちんと返す。
(7)	森はおもちゃや遊具の宝庫である。それらを考え、試して、工夫して遊具としている。
(8)	枝にいくつ切れ目をいれたか数える。また、この葉っぱ、星に似ているねなどと、形にも興味をもって活動している。
(9)	森に入る前に道路があり、注意する標識がある。左右左と確認して横断する。読み聞かせに入る前に、文字が読めたり興味がある子どもは絵本をすでに覗き込んでいた。

(10)	幼稚園には園舎があるところもある。しかし、私たちの幼稚園は森の中にある。幼稚園は子どもが遊びや生活を通して学ぶ施設だと気付く。
(11)	森の幼稚園で、子どもが直接国際理解を身に付けることはないが、本稿で述べたように、森の幼稚園は北欧、ドイツで発展している。テレビで他の国の森について放映されたときに、興味をもって視聴することだろう。



図5 フレーベルハウス前で(左横井)

通園児と KITA 通園児では、その家庭環境が違い、簡単に比較することはできないと思われる。この点、表8「6つの因子と平均値の比較」は、ペーターが森の幼稚園の卒園生と一般幼稚園の卒園生の比較をしたもので、家庭環境等の条件は統一されていて森の幼稚園の優位性を表すよい資料だといえる。

倉橋惣三⁷⁾が幼稚園雑草の中で森の幼稚園について著している。1. 森の先生の項目で「いかにも通称の示す通り、森の先生に相違ないのです。皆さんが△△

△停車場で電車を降りて南へ行って三町行かれると、もうこの森の頭が見えます。……(以下略)」と述べている。以下、2. ガーデン主義、3. 園芸主任、4. 笑がおの人、5. 詩の会、6. 応接間、7. 研究会、8. 新茶と続く。2. ガーデン主義の中に「つまり幼稚園は幼稚園だねえ」という言葉があり、倉橋が言う「森の幼稚園」はドイツ・ブランケンブルグで最初に始まった幼稚園のことを意味しており、本稿の森の幼稚園を直接指しているわけではない。図5はフレーベルが幼稚園を始めた地、ブランケンブルグのフレーベルハウス前での2人の筆者である。フランクフルトからブランケンブルグまでは特急と在来線を乗り継ぎ3時間ほどかかるが、ブランケンブルグはチューリングゲンの森の中にあり、フレーベルはそこで幼稚園を始めた。倉橋が言うように、確かに「幼稚園は森の幼稚園」であった。

第2章で述べたとおり、東海地方でもスウェーデンからやってきた妖精ムツレを中心とした森の幼稚園活動が盛んに行われている。ただし、ドイツの広大な森と日本の山の森はスケールが違い、当然遊び方も違うと思う。大きな意味では、森の幼稚園はフレーベルが始めた花園の幼稚園への回帰であると考えられる。今後、日本において森の幼稚園を見学させていただける機会があれば、さらに研究を深めていきたい。

参考文献

- (1) 今泉みね子・アンネッテマイザー・森の幼稚園・合同出版・2003
- (2) ペーターヘフナー・「ドイツの自然・森の幼稚園」・公人社・2009
- (3) 石亀泰郎・さあ森のようちえんへ・ばるす出版・1999
- (4) 澤渡夏代ブラント・デンマークの子育て人育ち・大月書店・2005
- (5) 岡部 翠・幼児のための環境教育・新評論・2007
- (6) ブールンドベリィ・視点をかえて・新評論・1998
- (7) 倉橋惣三・森の幼稚園・倉橋惣三選集第二巻・フレーベル館・1965